

# 茅ヶ崎の別荘史 その1・別荘跡の現況

女子短期大学部 川崎 衿子

## I はじめに

1898（明治31）年6月に茅ヶ崎駅が開設された。開設前々年の1896（明治29）年には、外科医・須田経哲が茅ヶ崎駅近くに別荘を建て、さらに歌舞伎俳優の市川団十郎がこれに続き小和田地区（現在平和町）に壮大な別荘を建設した。駅完成後は、さらに続いて宮内省、内務省の高級官僚、軍人、学者などが現在の中海岸、東海岸方面に別荘を構えるようになった。以後明治末には既に200棟を越す別荘があったといわれる。その様相は〔図1〕にみられるとおりである。

一方、後に戦前の最盛期には東洋一の設備をもつまでに発展した結核専門病院・南湖院が駅開設の翌年に開院した。南湖院の経営は都会の上層階級の患者を優待したことから、南湖周辺には、いわゆる文化人、富裕人が集まった。そしてこの存在は茅ヶ崎を単なる別荘地としてだけではなく療養地としての性格を広く印象づけることにもなった。

これらの動向は、人口6000人余であった旧来の農漁村・茅ヶ崎村の社会経済に多様な変化をもたらした。その後に行った関東大震災は当地に未曾有の被害を与え、さらに第二次世界大戦の影響を受けて、茅ヶ崎の別荘の様相は著しい変貌を遂げていく。

本研究では、茅ヶ崎の別荘地の開発過程と別荘の暮らしぶりやその特性を明らかにしつつ、明治・大正・昭和・平成にいたるまでの別荘の歴史的変容の考察を目的としている。

研究の開始に当たっては当地の長寿命住宅の悉皆調査が必須であり、その結果が研究の実質的な基礎部分となると考えられる。本報告では、その実地調査報告を主な内容としている。

## II 長寿命住宅の調査

### 1 調査概要

- ・ 調査時期 2001年9月～2002年3月
- ・ 調査方法

戦前の別荘分布図を一覧にまとめることから始めた。旧別荘の所有者の特定、そ

の所在の確認に当たっては「茅ヶ崎の文化を守る会」世話人代表・岡崎周氏、および川添隆行氏の調査記録、講義記録をもとに確認作業を行った。その結果 [図1] を作成した。得られた [図1] を手がかりとして、グループ別に主な道路沿いを実地踏査し、目的に適う長寿命住宅の抽出・発見に努めた。

調査用紙を作成し、建設年度、住宅の現況、所在地を記し外観の写真撮影を試みた。その際、可能であれば居住者に調査意図を明らかにしてインタビューすることを心がけた。

対象にする住宅の条件を以下のように設定した。

- ①旧別荘地に建設されている住宅、あるいはその係累者が居住していると思われる住宅は特に観察を密にする。
- ②建設年度のおおよその目標を戦前・1945（昭和20）年以前とする。
- ③非居住住宅についても、①②に属すると思われるものは現況を記す。
- ④外観よりの調査であり建設年代の明らかでないものは、調査者の判断を基準とする。

以上をもとに第1回の調査を実施した。

・2002年3月1日（金） 調査実施者

湘南設計管理協会

岸本 和彦

鈴木 仁

長沼 宏紀

三澤 護

山口 佳子

まち観まち景フォーラム

高見澤 和子

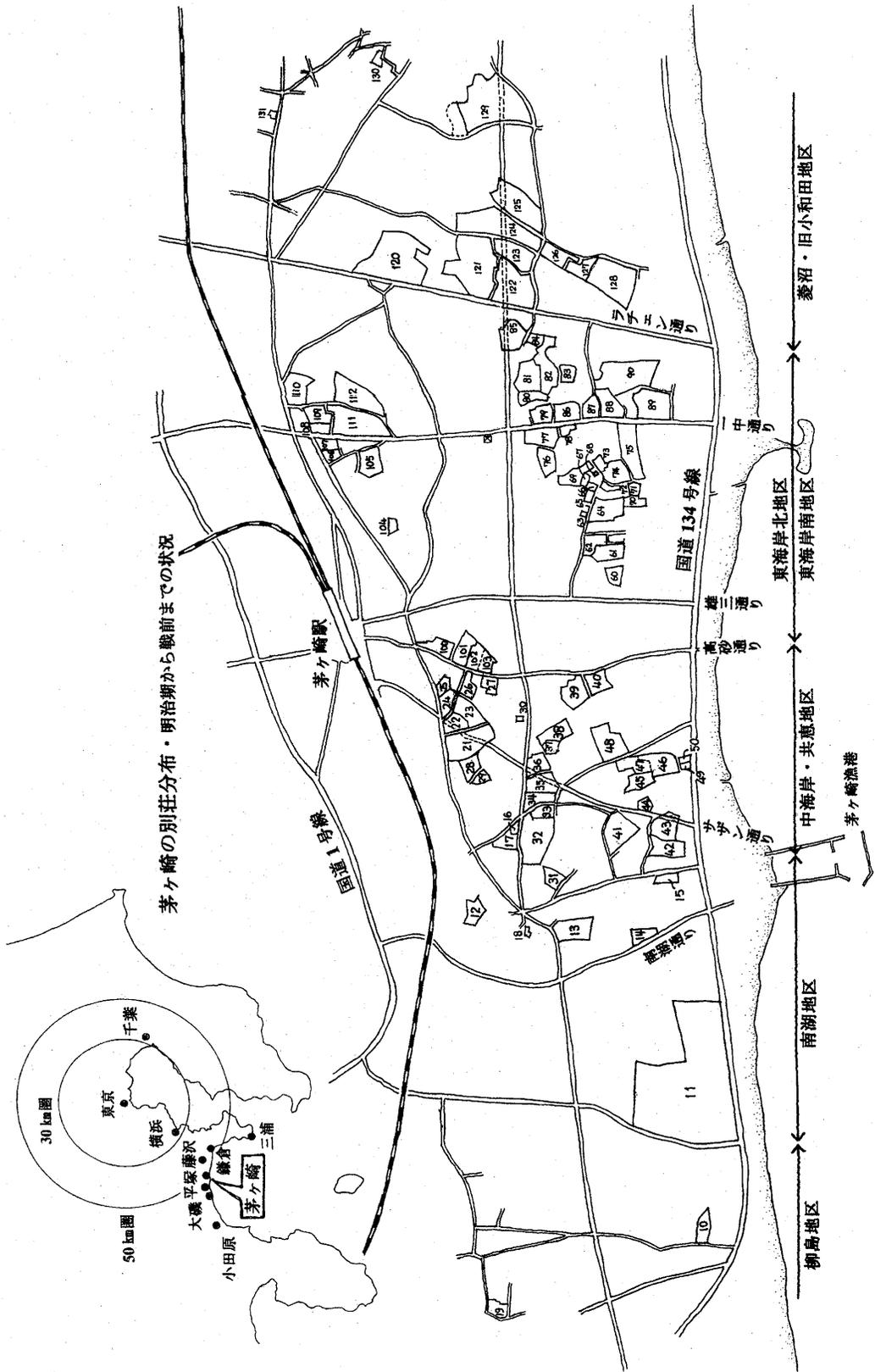
益永 律子

茅ヶ崎市都市整備課・まちづくり担当

文教大学女子短期大学部・筆者

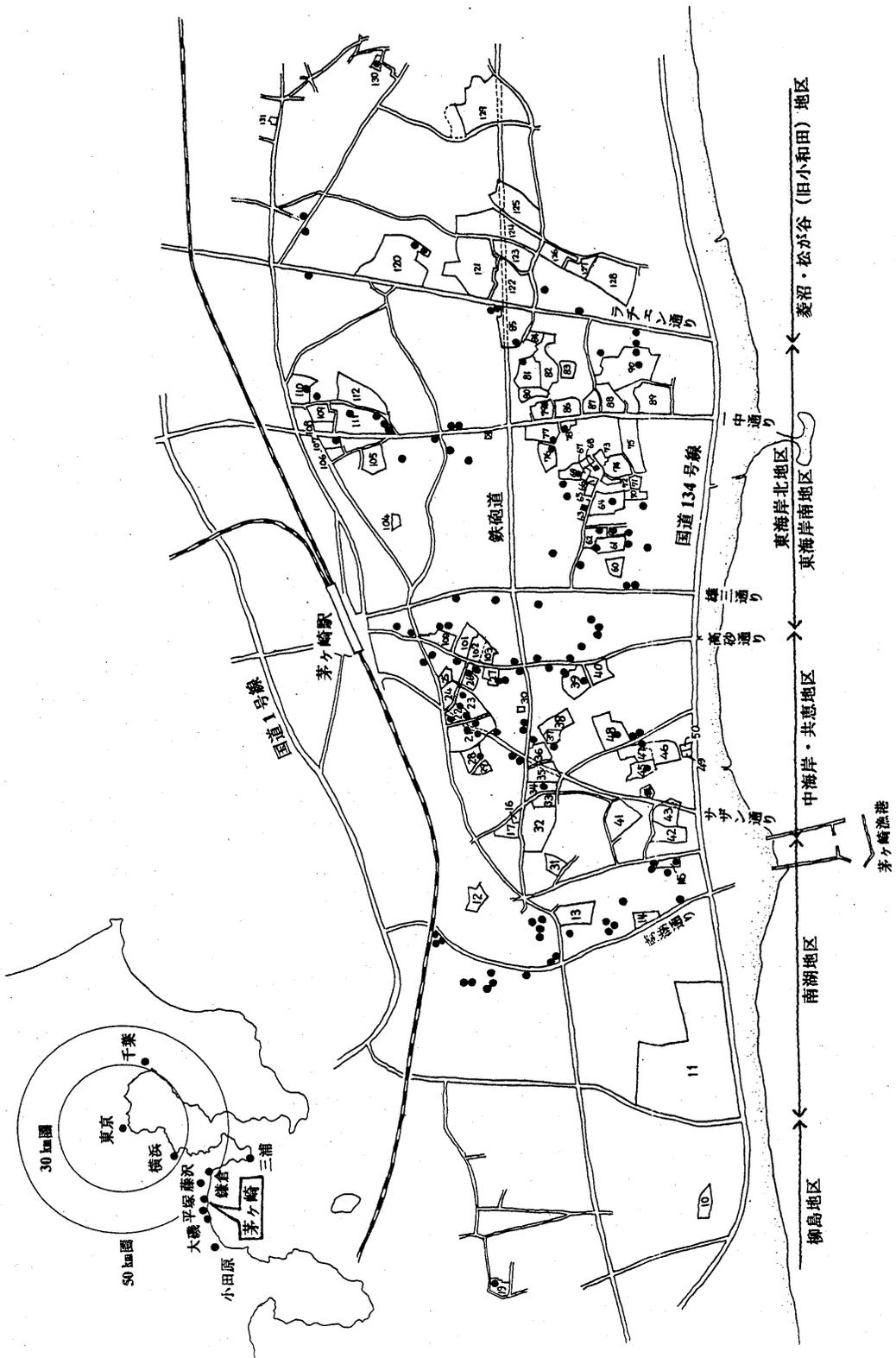
調査実施者を2班構成とし、それぞれが高砂通りとサザン通り周辺の調査を行った。主な通り周辺を分割し、担当範囲を分担して行うこの調査方式は以後も継承していくこととなった。

第1回調査を開始した後、同じ調査を年度を越えて行った結果、2002年7月末までに126件の抽出住宅を得ることができた。調査の実施は同じく湘南設計管理協会、まち観まち景フォーラム、茅ヶ崎市都市整備課・まちづくり担当、そして筆者が協同して行った。



茅ヶ崎の別荘分布・明治期から戦前までの状況

〔図1〕 戦前までの茅ヶ崎の別荘分布図



[図2] 長寿命住宅調査結果の抽出住宅 (●印)

## 2 調査結果

2001年度内の結果に加えて、一部次年度に踏み込んだ調査とを合わせて得られた抽出住宅は〔図2〕に示すとおりである。これらを基礎資料をもとにアンケート調査を行い、抽出住宅の建設由来、居住者の居住歴、過去の増改築歴の把握などを今後の調査目標とし、茅ヶ崎のまちの変容を解明したいと考えている。

以上の調査とともに、一方では個別の変遷事例の考察も並行して行った。その一部事例として現況実態が著しく異なるラチェン別荘と中村別荘をとりあげ、茅ヶ崎の別荘変容の考察を試みた。

## Ⅲ 事例にみる別荘変遷史

### 1 ラチェン邸（松が丘）

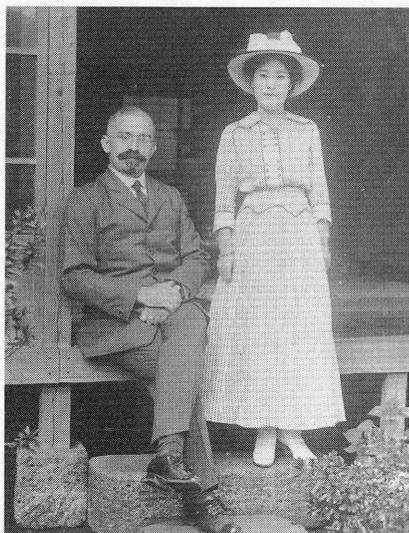
ラチェン通りの名前の由来となっているラチェン邸は〔図1〕のラチェン通りの東側・北方向のNo.120に位置している。

ルドルフ・ラチェン（Rudolf Ratjen 1879～1947）は、ドイツ・ハノーバーで生まれた。1902（明治35）年、23歳の時、炭酸水販売会社の社員として来日した。やがて土井朝於（アサオ 1893～1985）と知り合い、1908（明治41）年に二人は結婚した。アサオは1893（明治26）年に岡山で生まれたが、当時東京で語学を学んでいたという。結婚後、アサオ夫人の実弟を加えて大阪で始めた羅紗布地売買の事業が好調に進展し、東京・青山にラチェン商会を設立するまでになった。旧伊達家の武家屋敷を買い取り事務所に改造し、同じ敷地内の別棟を自宅とした。

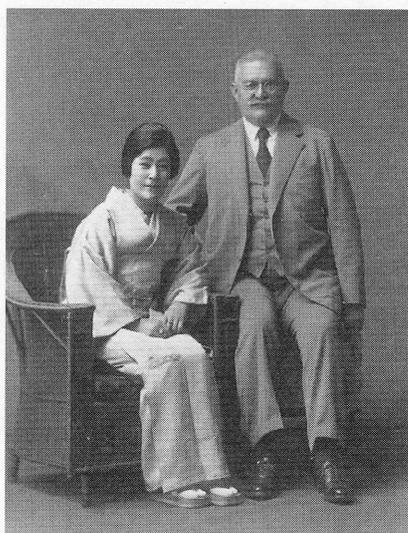
1922（大正11）年、東京府主催により上野公園で平和記念東京博覧会が開催された。その際、ラチェン商会はドイツ・ヘンケル社の刃物を出展し、以後貿易商としてその名は広く知れ渡ることとなった。その他にもゾーリングンの刃物、ダイムラー・ベンツの自動車、ライカのカメラ、時計、エルネマンの映写機などを扱い、事業は拡大・発展していった。

1937（昭和12）年頃、日本に持ち込まれた初の乗用ベンツ（1920年式メルセデスベンツ）を御料車として当時の宮内省に7台納める実績を得、ラチェン商会は隆盛を極めた。

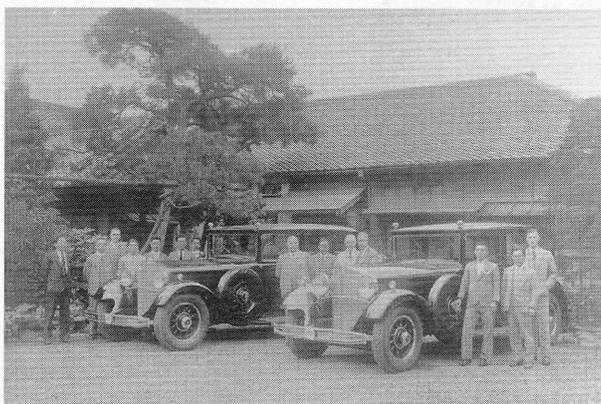
また、ラチェン商会ではポリドール・レコードの吹き込みスタジオの経営を始めており、青山の地所内からは数々の流行歌が生まれていった。実業界をはじめとして宮家、芸能界、芸術家にまで広がる交友関係が、さらにその事業を発展させた。



[写真1] 新婚のラチェン夫妻



[写真2] ラチェン夫妻・昭和初め頃



[写真3] ベンツを宮内省に納める際の記念写真  
青山のラチェン商会前にて



[写真4] ラチェン別荘・1



[写真5] ラチェン別荘・2

1932（昭和7）年、ラチェンは現在の松が丘一带の1万2千坪の土地を購入し、1936（昭和11）年に広大な別荘本館を完成させた。床面積は300坪（約1000㎡）ともいわれ、正面玄関には車寄せのロータリーをもつ屋敷であった。その落成パーティの様子を撮影した8ミリフィルムから、当時の贅沢な暮らしの様子を垣間見ることができる。

着飾った人々、多くの外人との会食、ラチェンが植えた自邸から海岸まで続く桜並木、そろいのハッピを着た出入りの職人達、無声フィルムではあるがあたかも嬌声が聞こえてくるかのような賑わいである。

しかし戦況が悪化していく1942（昭和17）年頃から、ラチェン商会にも陰りが見えてきた。やがて終戦を迎え、ラチェン夫妻は青山を離れ茅ヶ崎に居を移した。しかし本館はGHQに接収され、夫妻は敷地内に残されていた仮設小屋に住まわざるをえなかった。苦労の中でラチェンは1947（昭和22）年、68歳で亡くなった。その後未亡人となったアサオは土地を手放しながら生計を立ててきた。ラチェン亡き後の1947（昭和24）年、アサオは90坪ほどの和風住宅を建て、ここに移った。

1958（昭和33）年、土地の形状は大きく変わった。本館のあった場所の2000坪をTOTOに売却し、TOTOは本館を取り壊して、ここに社員寮を建設した。本館の前庭にあった500坪の広さの池も埋め立てられ、往時の面影はなくなっていったが、池にかかっていたコンクリートの橋は残された。過去の数少ないラチェン邸の存在を示すものとして、この橋は現在でも見ることができる。

1976（昭和51）年、子どもがなかったアサオは、この年83歳になって養女を迎える。アサオの実弟の娘である美佐子は55歳でアサオの養女となったが、もともと夫妻とは昵懇の間柄であり両者にとって最良の選択であったと思われる。またアサオの実弟の長男一家すなわち美佐子の実兄一家が、1979（昭和54）年より隣接して居を構えることとなり、ラチェン邸跡地に住む縁戚者住居は2軒となった。

1985（昭和60）年1月、アサオが亡くなり、その翌年1986（昭和61）年、アサオが建てた90坪の和風住宅は取り壊され、同じ場所に木造平屋建ての住居が建設され現在に至っている。昭和7年にラチェンが購入して1万2千坪の土地は、約300坪が養女に相続されているのが現況である。

## 2 中村邸（三住町）

1939（昭和14）年竣工の木造平屋建てで、建設当時とほとんど変わらぬまま現存している。[図1] 中最も東側のNo.130に位置する。

[図3]の中村邸平面図は保存されていた竣工図を筆者がかき改めたものである。

初代当主は1889(明治22)年生まれ、後年東京・荏原(現品川区)にて精密機械会社を創立し、特に軍需事業で財をなした。茅ヶ崎に別荘を構想した頃、この周辺一帯は砂地で、敷地は700~800坪であったという。

設計は、当主の会社所在地と同じ東京・荏原に事務所を構えていた溪恒次郎が行った。1938(昭和13)年より設計が開始され翌年竣工した。施工は逗子の大工・松井が当たった。

住居平面は玄関脇に洋間を備えた中廊下型住宅であり、和室部分にも随所に細かな技巧が凝らされている。南東に突き出た洋間は、外壁はモルタルリシン仕上げで、突き出た二つの出隅が切り取られた形状である。内部は腰が鏡板張り、上部は漆喰仕上げとなっている。天井は舟形天井である。

分銅式の上げ下げ窓の位置は、建設途中で設計変更が行われた。図面上の東面(暖炉の所)と西面(引き違い窓の所)にも同じ上げ下げ窓が設けられ、全部で6箇所窓がこの洋間の雰囲気を作り上げている。壁の一部には木蓮の花柄のステンドガラスの丸窓が嵌め込まれている。窓の外側には優雅な透かしを彫り込んだ観音開きの鍔戸があり、外観からもこの建物の精緻な造作が感じられる。

建設後ほどなくして大戦の影響が深まる中、当主は非常事態を想定して家具などを徐々に茅ヶ崎に移し疎開の準備を進めた。1945(昭和20)年5月、東京の本宅一帯は空襲を受け家は焼失した。ただちに初代夫婦と次男(長男は戦死)の3人は茅ヶ崎に転居した。

1946(昭和21)年次男は結婚し、2世代4人の生活が開始された。その後、次男夫婦に二人の子どもが生まれ、6人家族の時代を経て、1958(昭和33)年には初代夫婦は伊豆に転居し、以後茅ヶ崎では2代目・次男夫婦の親子4人が暮らすこととなった。

その後、成長期を迎えた子ども達に個室が必要となったため、浴室は改装されて長女の部屋となり、北側東の和室(女中室)は長男の個室となった。

1960(昭和35)年頃、上水道が敷設され、それまで人研ぎであった流しをブリキ仕様に変えた。1986,7(昭和61,2)年頃、台所の大改装が行われた。隣接する納戸と台所は一体化され、設備を一新して最新のダイニングキッチンに改造され、そのまま今日まで使われている。

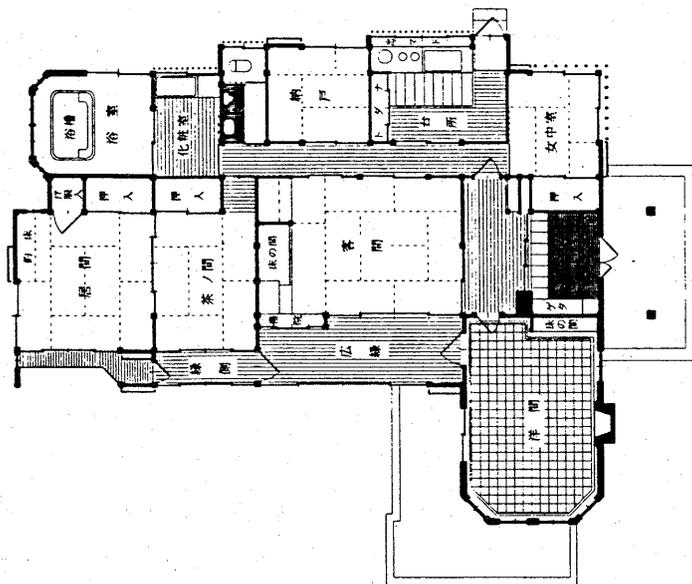
1994(平成6)年、2代目当主が亡くなり、現在は未亡人が細部にまで行き渡った管理を行い引き続き居住している。

敷地は道路整備や相続税工面などで削減され、現在約600坪となっているが、邸宅

内の樹林群は市の保存樹林の指定を受け、美しい庭園環境が維持されている。

住宅とは別棟に敷地内には江戸時代に建造されたという茶室がある。東京・麹町の下屋敷にあったものを移築し、数寄屋建築の専門家に修復を依頼し1年の工期をかけて1982（昭和57）年に完成した。

敷地内には、さらに2002（平成2）年に竣工したばかりの二人の3代目のための二所帯住居がある。従って、ここでは19世紀、20世紀、21世紀の3世紀のそれぞれの建物を同時にみることができる。



[図3] 中村邸平面図・保存図面より筆者作成 2002年3月

#### Ⅳ おわりに

資産の状態、所有地の状態は規模の大きい別荘ほど変化が激しく、中小規模の例では変化が顕著ではない。多額な納税負担をはじめとして屋敷内の樹木剪定、清掃に関わる費用など大規模別荘ほど悩みは多い。

当主の死亡やそれに伴う相続問題は、必然的に建物や所有地の形状を変化させる。当時の家の形を残しながら、長く住み続けられていく条件は一様ではないが、中でも居住者と家との結びつきの深さ、愛着の度合いが大きな影響力を働かせていることは否めない。その意味では、居住者自身が日常的に、関わり合いをもつことのできる適度な住居規模が住宅の寿命を長くさせる要因ともなっていることが本報告の事例から感じとることができる。

尚本報告は継続研究の中間報告である。